

おわりに ● ● ● ● ●

この本では、10の場面を設定して、家庭でできる子どもへのサポートについて「小さな工夫」を紹介しました。

具体的な状況を思い浮かべていただけるよう、それぞれの場面を設定しています。特定の子どもや保護者について書いているものではなく、誰にでも起こりうる場面になるよう作成したものです。「わが家でも同じようなことが起きている」「同じようなことが起きるかもしれない」と感じた読者の方もいらしたことと思います。場面そのものは違っていても、「ここで生じている親子の関係は似通っている」と感じた読者の方もいらしたかもしれません。

ぜひ、ご自身の体験と重ね、ご家庭でどんなことが起きそうか想像しながら本書を読んでみてください。そして、「できそうだ」「やってみたい」と思える「小さな工夫」をご活用いただけたらと思います。小さな変化が、次の良い変化につながって、いつの間にか大きな良い変化が生じているような、そんな第一歩になることを願っています。

ところで、文部科学省の統計によれば、不登校の児童生徒数は令和5年度には34万6482人となりました。11年連続で増加し、過去最多となったそうです。これほどまでの数の子どもが

不登校となっているということは、不登校は子ども個人や保護者、あるいは家庭の問題ではなく、学校や教育の仕組み、社会のあり方の問題だと思います。

そう考えると、不登校の子どもたちが安心して学び成長できる環境や仕組みを、まずは社会が整えるべきなのではないでしょうか。本当はこの本で紹介したようなかわりをしなくても、不登校や学校に行きづらい子どもたちが無理なく自然に学んで成長できる、そんな社会が実現されることのほうが大切だと思うのです。

実際、ここ数年、社会や学校は少しずつ変わろうとし始めているように見えます。ただ、そのスピードはゆっくりしたもので、まだまだ十分とは言えません。今後も社会や学校の変化がさらに進んでいくことを本当に強く願っています。子どもたちが小さく動き始めるのを大人が小さく待つことができる、感情が自然と受け止められる、みんながリラックスできる……。社会や学校がそのように変化していくことこそ、大人も子どもも待ち望んでいる変化ではないかと思います。

そしてこの本が、そういった小さな変化につながることに貢献できたらうれしいです。それが次の小さな変化につながり、またさらに次の小さな良い変化につながっていくことを想像しています。読者の皆さんのまわりでも、そのような良い変化につながっていくことを願っています。

2025年3月

半田一郎